気候変動時代の豪雨災害に備える

～西日本豪雨５年の歩みから学ぶ

山陽新聞社編集局報道部
古川和宏

■01　はじめに

・発表者／古川和宏（山陽新聞社編集局報道部、西日本豪雨当時は総社支局）
・倉敷市真備町生まれ、真備町居住歴は約40年。実家は農家
・小田川が時々氾濫する、という話は祖父、父らから聞いていた

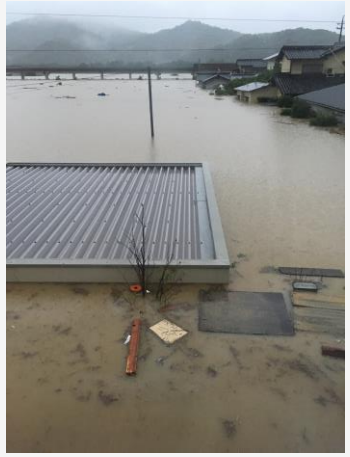
西日本豪雨当日
・2018年7月7日未明、小田川氾濫発生。取材先から帰宅中に高馬川堤防決壊を目撃
・胸辺りまで水に漬かりながら帰宅。家族の無事を確認
・車庫からカヤックを出し400㍍離れた実家へ。70代の両親は2階に避難
・自宅では妻と娘２人、実家では両親が取り残される
・13～15時間後にボートで救助される

■02　被災当日

2018年7月6日午後11時ごろの宮田橋。今まで見たことがないほどの水位。堤防上からは水面に手が届きそうだった

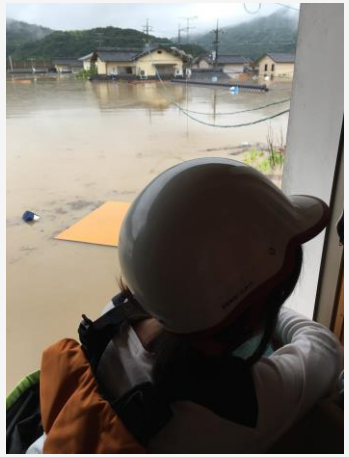
7日午前1時20分ごろの高馬川堤防。決壊し濁流が付近の住宅を押し流していた

7日午前7時ごろ自宅2階から。奥に見えるのは井原線。雨は降り続け、徐々に水位が上がる



７日午前8時ごろ。水位上昇は止まらず

子どもたちにはライフジャケットを着用させた。次女はヘルメットをかぶっていた



■03-1　被災直後

7月9日朝、やっと水位が下がり、自宅に戻ることができた。家の中は足の踏み場のない惨状。水に漬かった日用品から食料、思い出の品…再利用できそうなものはほとんどなかった。「すべて失った」

■03-2　被災直後

山陽新聞　第3種郵便物認可

「家族絶対守る」

西日本豪雨

倉敷・真備で本紙記者被災

2階まで水 懸命避難

西日本豪雨で深刻な被害を受けた倉敷市真備町地区。同地区に住む山陽新聞の記者も自宅が2階まで浸水、家族とともに懸命に避難し、救出を待った。

6日、梅雨前線の影響で県内でも雨が降り続き、記者が担当する倉敷市真備町前田の自宅に帰宅。同10時半、雨が強くなってきた。自宅から南へ300㍍ほどの実家に住む母親（71）から「避難せんでええかな」と電話があるが、父親（74）は足が弱いため、逆に危ない」と避難を止めた。

同11時半を回った頃、雷のような爆発音と地響き。家の窓ガラスが破れそうなほど揺れた。現場へ急行すると、濁流の中の工場が燃えていて、土手を挟んだ数軒から火の手が上がっていた。しばらくすると携帯電話のエリアメールで「小田川河川氾濫発生」の知らせ。応援の記者に引き継ぎ7日午前1時すぎ、急いで自宅へ車を走らせる。

自宅近くの道はすでに膝の高さほどの濁流だった。車を徐行、歩いて家を目指すが、側溝に落ち全身ずぶぬれ。車に戻り、走れそうなら再び自宅に戻ろうと思ったが、どれも泥だらけ。

自宅2階で救助を待つ間に妻が撮影した倉敷市真備町地区。左奥に見えるのが井原線高架＝7日午前9時26分

倉敷市真備町箭田の自宅に車を止め、決壊位置から遠い方面に回る。

「家族は絶対守る」。覚悟を決めて自宅を目指した。

胸まで漬かりながらやっとのことで自宅に到着。中学2年生と小学6年生の娘2人と妻にライフジャケットを着けるよう指示し、車庫にあるカヤックで実家に向かった。大声で呼ぶと、2階から返事がありひと安心した。

その後も水位の上昇は止まらない。最悪の場合、小田川の土手の高さまでいく。亡くなった祖父が「2階の軒と土手が同じ高さ」と話していた。そこより高い場所なら助かる。

そう思った時、自宅が心配になった。明るくなった午前4時半ごろ、屋内に入れていたカヤックを出すことができず断念した。

そのうちに2階の床に水が到達した。同8時ごろだろうか。まず母親を屋根に上らせ、父親はカヤックに乗ってもらうことにした。

「そのうち救助に来てくれる」。そう楽観視していたのは、浸水範囲が自宅周辺だけと思っていたからだ。3時間ほどたったころ、屋根に上ってみた。自宅が見え、2階の窓に娘2人がしがみつき、笛を鳴らしたり、「助けて！」と叫んだりしていた。

消防署のボートが見えたのは、さらに2時間以上たってからだ。両親を含め、近隣に取り残されていた高齢者5人全員が救助されるにはさらに1時間半ほどを要した。すぐさま、井原線の高架を通って自宅前に接近。「もうすぐ助けが来るから」と娘を励ました。

妻と2人の娘が救助されたのはそれから3時間後の7日午後5時半ごろ。ボランティアのボートで助けられたという。高台に止めていた車で避難所に向かう途中、ニュースでまだ多くの人が取り残されている事実を知る。

「小田川は逆流するけーこえん（怖いん）じゃ」。祖父の言葉を、もう少し早く思い出しておくべきだった。

（古川和宏）

2018年7月10日付朝刊

陽新聞　第3種郵便物認可

見えない生活再建

西日本豪雨

本紙被災記者 家屋片付けルポ

ゆがんだ床板、横倒しのピアノ…

作業に人手「力貸して」

西日本豪雨から1週間がたった13日も、甚大な被害を受けた倉敷市真備町地区では被災者が、浸水した家屋の片付けに追われた。炎天下、体力はいや応なく奪われ、疲労がたまっていく。一日も早い生活再建を願いながら作業を進めるが、なかなかはかどらず、気持ちは焦るばかり。「力を貸してください」―。被災した住民でもある記者が現地からルポする。（古川和宏）

自宅2階まで押し寄せた水がやっと引いた9日、自宅に妻と足を運んだ。玄関の引き戸を開けて中を恐る恐るのぞくと、めちゃくちゃな状態に胸がつぶれそうになった。

水を吸って膨張した柱、ゆがんだ床板、横倒しになったグランドピアノ、泥をかぶったテレビにエアコン、冷蔵庫などの大きな物を外に出すことができ、気分が少し楽になった。

そして、ごった返していた室内に搬出の通路ができたことで、家財道具を運びやすくなった。

自宅から南へ300㍍ほどの実家の片付けにも、知人や親戚が応援に訪れてくれている。水をたっぷり含んだ畳は重く、大人の男4人で1枚を運ぶのがやっと。皆さんの協力で13日は50枚以上を運び出すことができた。

近所では、まだほとんど手つかずの家屋もある。実家の近隣は高齢者の世帯が多く、支援を得るためにはどう声を上げていいのか分からず、困り果てている人もいる。作業の終わりはまったく見えない。いつ終わるか想像もつかない。

今は支えられる立場。支えてくれる人たちが周りにいてくれるだけで、めいりかけた心がほぐれる。

西日本豪雨の被害は県内各地に及んでいる。被災者が前を向けるよう、支援の手を差し伸べてほしい。

「どこから手をつければいいのか」。リビングでしばらくぼうぜんと立ち尽くした。それから一つ一つ部屋を回ると、中学2年と小学6年の娘2人の教科書や思い出の写真のデータが詰まったハードディスクがあったが、どれも泥だらけ。全て失った―。そんな気持ちになった。この日は夕方までに財布や実印などの貴重品を探し当てるのが精いっぱいだった。

10日からは連日、ありがたいことに友人や会社の同僚らが手伝いに駆け付けてくれた。冷蔵庫などの大きな物を外に出すことができ、気分が少し楽になった。

そして、ごった返していた室内に搬出の通路ができたことで、家財道具を運びやすくなった。

自宅から南へ300㍍ほどの実家の片付けにも、知人や親戚が応援に訪れてくれている。水をたっぷり含んだ畳は重く、大人の男4人で1枚を運ぶのがやっと。皆さんの協力で13日は50枚以上を運び出すことができた。

近所では、まだほとんど手つかずの家屋もある。実家の近隣は高齢者の世帯が多く、支援を得るためにはどう声を上げていいのか分からず、困り果てている人もいる。作業の終わりはまったく見えない。いつ終わるか想像もつかない。

今は支えられる立場。支えてくれる人たちが周りにいてくれるだけで、めいりかけた心がほぐれる。

西日本豪雨の被害は県内各地に及んでいる。被災者が前を向けるよう、支援の手を差し伸べてほしい。

被災した実家を片付けるために駆け付けてくれた友人。支援に感謝の言葉しかない＝13日、倉敷市真備町地区

2018年7月14日付朝刊

■04　被災後

・被災地で生活する住民の一人として復旧・復興の状況、思いを継続的に書いてみては、との提案を受け随時掲載の企画「まび日誌」執筆をスタート

27　第1全県　2018年(平成30年)10月28日　日曜日

まび日誌

被災記者から

「希望の音」と言い聞かせ

西日本豪雨から100日が過ぎた。週末ごとの自宅の片付けは、自分の中で“日常”となってしまった。

倉敷市真備町地区内ではスーパーや飲食店などが次々と再開している。自宅2階の被災を免れた人の中には、応急的なリフォームを施し2階で生活を始めた人も増えてきた。

明るさを取り戻しつつある一方、2階まで浸水した地区は今も人けがほとんどなく、聞こえるのは重機が建物を倒す音ばかり。週末ごとに訪れると、何軒もの家が解体され、更地になっていることに気付く。新しい家は建つのだろうか。何ともいえない寂しさと不安を感じる。

例年なら、真備町では稲刈りの時季だ。田園地帯は黄金色に染まるはずなのに、稲が枯れ、夏に勢力を増した雑草が腰の高さほどに生い茂っている田んぼもある。わが家もそうだ。

自宅の片付けが一段落した農家は草刈り作業に取り掛かりつつあり、建物を解体する重機に混じって、草刈り機の音があちこちから聞こえる。自分も来春の作付けを目指し、直径30㌢ほどの小さな草刈り機の刃で、何十㌃という田んぼの草に挑んでいる。

解体の後は、住宅が再建されるはず。来年は稲穂が実る秋を迎えたい―。

◇

真備町地区の自宅と実家が全壊し、地区外で暮らす本紙記者が、復旧の歩を進めようとする地区の日常をつづる。

＝随時掲載

雑草が腰の高さほどに茂った真備町地区の田んぼ。来年、稲は作付けできるのだろうか

選択と決断　自問の日々

被災の本紙記者

時の経過を早いと感じるよりも、むしろ先が見通せない道のりを思い、途方に暮れてしまう。

西日本豪雨から3カ月の率直な心境だ。

2階まで浸水した倉敷市真備町地区の自宅と実家は、ほぼ片付けを終えた。この間、水に漬かり、泥にまみれた建物や家財道具を前に、膨大な数の選択と決断を繰り返した。取り壊すのか、直すのか。

古川和宏記者

捨てるのか、残すのか。

一段落した今、それが正しかったのかどうか、自問する日々が続いている。

思い出の品々

例えば、中学2年と小学6年の2人の娘が弾いていたピアノ。40年ほど前、父親が私の妹のために買った品を譲り受けた。被災後にリビングから出し、しばらく庭先に放置していた。修理不能と判断されたものの、思い出が詰まっており、他のごみと一緒に捨てる踏ん切りがつかなかった。

ぬれて表面の色がにじんで何が写っているのか分からなくなった写真、泥でページがめくれない手帳やノートなども「何とかなるかも」との思いが消えず、車庫や避難先に山積みにしたままだ。

自宅はリフォーム、高齢の両親が住む実家は一部を残して解体を決めた。築45年たつが、屋根のふき替えをしたばかりの母屋の外観は比較的きれいな状態。「取り壊すのはもったいない」。近所の方や来訪者からそう言われながらも、将来にわたって維持していくのは難しい。心は揺らぐが、決断しなければ前に進めない。

「いつ戻れるん？」

2人の娘は、妻とともに岡山市内の妻の実家で避難生活を送る。仮設校舎への通学は、自転車と電車、スクールバスを乗り継ぐ。被災前は徒歩や自転車で10分足らずだった通学時間は1時間を超え「休み時間は疲れて寝ている」と打ち明ける。

「大変だけど、みんなに会えるから楽しい」。そう言って笑顔を見せる2人は「いつになったら真備に戻れるん？」とも口にする。

リフォームを決めた自宅は内装の解体が終わり、柱と梁、外壁と屋根だけになった。工事を請け負う工務店に聞くと、清掃と乾燥を経て年明けごろには着工できる見通しだが、被災地でリフォームなどが相次いでおり、着手がずれ込むことも想定されるという。自宅で生活できるようになるのは、来年春以降となるのは確実だ。

自宅2階で保管していたが、泥水で汚れてしまった思い出の品々。娘たちが幼かったころ描いた絵や習字、日記などは捨てられないままでいる

ずっと忘れない

ピアノは、豪雨災害から2カ月を迎えたころに思い切って処分した。トラックで仮置き場に運び、山積みの災害ごみの一部と化した光景は、ずっと忘れないだろう。

西日本豪雨後も、台風や北海道での地震と大きな災害が続いている。「これから同じような思いを抱く人が大勢いるのだろうな」。被災した家屋をニュースで目にすると、自分の境遇と重ねてしまう。

特段することがなくても、休日には自然と自宅に足が向く。片付けで動き回っていた時は自分の周りを見るだけで精いっぱいだったが、今は多くの犠牲者が出てしまった現実や地域の将来に考えが及び、時に気分が沈むこともある。

「被災から3カ月過ぎたころが、一番つらかった」

東日本大震災で被災した友人の言葉を思い出す。（古川和宏）

2018年10月5日付朝刊

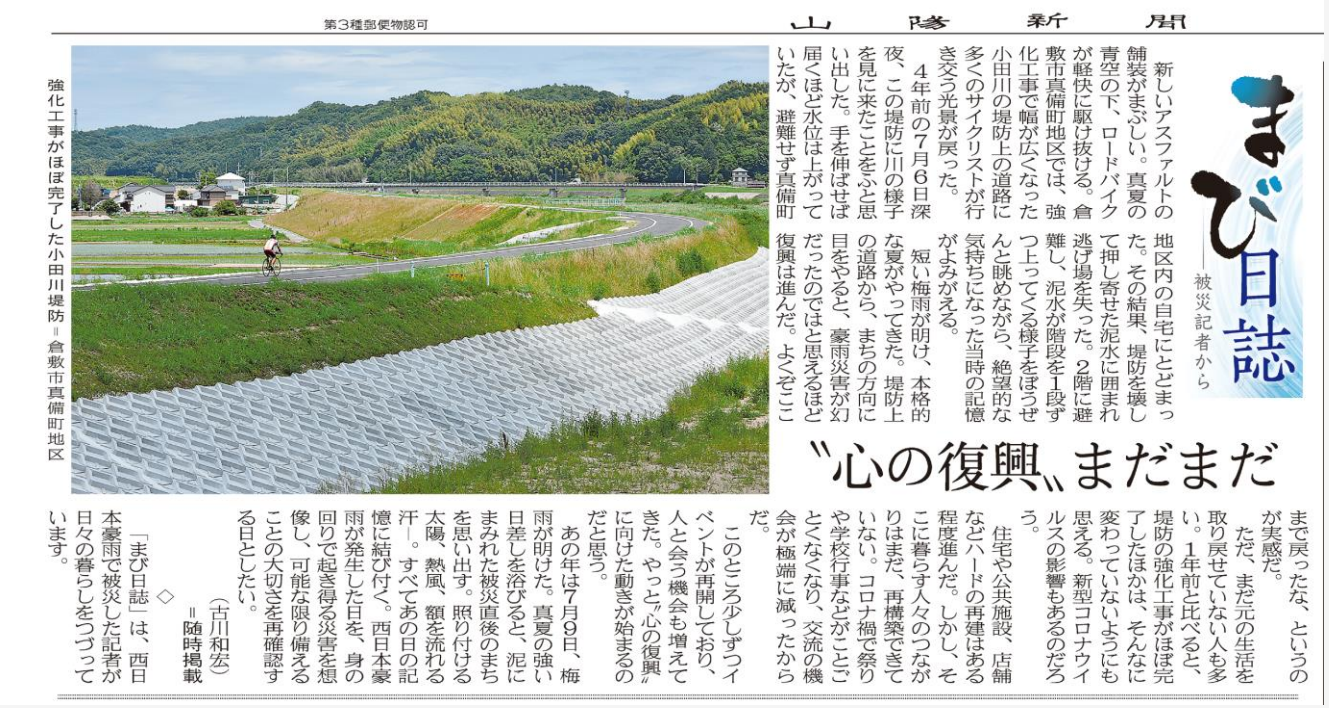
■05-1 「まび日誌」

・時間とともに変化する被災地の風景と心情を被災者の目線でつづっている

・見えているもの、感じたことを素直に記すことを心がけている

・あくまで「個人的な思い」だが反響は大きく「被災者共通の思いなのかもしれない」と感じ、書く意義を見つけた気がした

■05-2　まび日誌



山陰新聞　第3種郵便物認可

まび日誌
―被災記者から

〝心の復興〟まだまだ

新しいアスファルトの舗装がまぶしい。真夏の青空の下、ロードバイクが軽快に駆け抜ける。倉敷市真備町地区では、強化工事で幅が広くなった小田川の堤防上の道路に多くのサイクリストが行き交う光景が戻った。

4年前の7月6日深夜、この堤防に川の様子を見に来たことをふと思い出した。手を伸ばせば届くほど水位は上がっていたが、避難せず真備町地区内の自宅にとどまった。その結果、堤防を壊して押し寄せた泥水に囲まれ逃げ場を失った。2階に避難し、泥水が階段を1段ずつ上ってくる様子をぼうぜんと眺めながら、絶望的な気持ちになった当時の記憶がよみがえる。

短い梅雨が明け、本格的な夏がやってきた。堤防上の道路から、まちの方向に目をやると、豪雨災害が幻だったのではと思えるほど復興は進んだ。よくぞここまで戻ったな、というのが実感だ。

ただ、まだ元の生活を取り戻せていない人も多い。1年前と比べると、堤防の強化工事がほぼ完了したほかは、そんなに変わっていないようにも思える。新型コロナウイルスの影響もあるのだろう。

住宅や公共施設、店舗などハードの再建はある程度進んだ。しかし、そこに暮らす人々のつながりはまだ、再構築できていない。コロナ禍で祭りや学校行事などがことごとくなくなり、交流の機会が極端に減ったからだ。

このところ少しずつイベントが再開しており、人と会う機会も増えてきた。やっと〝心の復興〟に向けた動きが始まるのだと思う。

あの年は7月9日、梅雨が明けた。真夏の強い日差しを浴びると、泥にまみれた被災直後のまちを思い出す。照り付ける太陽、熱風、額を流れる汗―。すべてあの日の記憶に結び付く。西日本豪雨が発生した日を、身の回りで起き得る災害を想像し、可能な限り備えることの大切さを再確認する日としたい。

（古川和宏）
＝随時掲載

◇

「まび日誌」は、西日本豪雨で被災した記者が日々の暮らしをつづっています。

強化工事がほぼ完了した小田川堤防＝倉敷市真備町地区

・「かつてどのような災害が発生したかを知る」

・「身の回り起こり得る災害を想像し、可能な限り備える」

2022年7月7日付朝刊

■06　地元紙記者として

・豪雨被災から5年半が過ぎた。「書き残すのが使命」との思いは変わらない

・読み返すと、心情が変化している部分があったり、一貫して変わらないものがあったり。その時々の思いを書き残すことの大切さを実感する

・今後も自分なりの視点で発信し続けていく

0月14日　月曜日　山陽新聞　第3種郵便物認可

あすから新聞週間

西日本豪雨
発生から1年3カ月

岡山県内に戦後最大級の水害をもたらした西日本豪雨は、昨年7月の発生から1年3カ月余りが過ぎた。決壊した河川や公共施設といったインフラの復旧・改良は進みつつあるが、県内で被害が最も大きかった倉敷市真備町地区を含め依然として爪痕は残り、住民の生活再建も始まったばかりだ。被災地に向き合い、ともに復興の道を歩むのは地元紙の責務でもある。今こそ、その役割を地域、読者と考えたい。15日から新聞週間―。

復興の道 ともに歩む

書き残すのが使命

被災した本紙記者　古川和宏・総社支局長(48)

昨夏の西日本豪雨で倉敷市真備町地区にある自宅が浸水で全壊してから1年3カ月余りたった。まさか自分が生まれ育った真備で、これほど大きな被害が出るとは夢にも思っていなかった。妻や子ども、仕事のこと、全壊した自宅近くの実家のこと。当初は不安ばかりだったが今は少し違う。被災した地元紙の記者として、長いようで短くも感じられるその時々の思いを書き残していくことが使命と胸に刻んでいる。

まび日誌

豪雨直後の変わり果てた古里の現状を伝えるルポや、被災者の立場から、時間の経過とともにその折々の心情をつづった「まび日誌」を書かせてもらっている。

ルポでは水が引いた自宅に妻と足を運び、めちゃくちゃな状態を見てリビングで立ち尽くしたことを記事にした。まび日誌には地域の日常を織り交ぜた。

秋、例年なら黄金色に染まる田園地帯に雑草が腰の高さほど茂っていた。冬、初日の出を見ようと自宅近くの高台から望んだまちには被災して手つかずの家屋が所々にあった。春、田んぼに出ると数百㍍先の住宅街は解体が進み、建物は半数以下に減っていた。

目の前には前年までと全く違う風景が広がっていた。今見えていること、自分の思いをそのまま書いた。

正直に言えば、最初は積極的に書きたいとは思わなかった。なぜなら「一人の被災者の個人的な思いを書いたところでどうなる」という気持ちが強かったからだ。

取材を進めていくうちに、書きたいことがたくさん出てきた。住宅を解体する重機や草刈り機の音を復旧・復興への〈希望の音〉、今年も田植えの準備を始められた時には〈『いつも通り』のことを一つでも取り戻したい〉と記した。

読者からは「記事読んだよ、よかった」「思っとったことなんよ、ありがとう」といった反響があった。「今、自分が思っていることは『個人的な思い』だが、被災者共通の思いなのかもしれない」。そう感じるようになり、書く意義を見つけたような気がした。豪雨に触れたくない、思い出したくない人もいるだろうが、被災者の思いを記事として残すのは重要なことだと確信している。

「被災者の思いを書き残すのが使命」と胸に刻み、取材する古川支局長＝総社市役所

ジレンマ

豪雨後、担当する総社市では、災害復旧に向けた行政の対応や被災者支援など、災害に関する取材がほとんどだった。

当時、物事を客観的に捉えなければならない記者でいる時は「自分が被災者である」という事実から離れて没頭できる瞬間でもあった。しかし、被災者の内面に一歩踏み込んで取材するのはつらくてできなかった。置かれた状況を冷静に分析すると自分自身と重なり、つい目を背けてしまう…。そんなジレンマを抱えた時期もあった。

発信し続ける

今、被災者が一番恐れていることは「忘れ去られること」だろう。

真備町地区の約2万人のうち、約5600人が今も仮設住宅で暮らす。いち早く自宅を建て替えて地域に戻った人もいれば、先行きが全く見えない人もいる。生活再建の格差は広がりつつあり、フォローしなければならない。

2014年夏に、岩手県釜石市であったトライアスロン大会にプライベートで参加した時のことを思い出す。東日本大震災から3年以上たち、被災者に声を掛けることさえできていなかった自分を「被災地に思いを寄せてくれていると感じられることが復興の力になる」と応援に駆け付けた地元の人が歓迎してくれた。

自らが被災した今、その言葉の重みを強く実感している。

少しずつ復興へ向かっている真備。これからも被災地の思いを自分なりの視点で捉え、発信し続けていきたい。

西日本豪雨からの復興に向けて歩む被災地。元の風景を取り戻しつつある町並み（左）、被災家屋が残る住宅地（右上）、2年ぶりの地域行事で笑顔を見せる住民のコラージュ＝いずれも9月、倉敷市真備町地区